
fatexx3 **第三次聖杯戦争**

度会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a t e x x 3 第三次聖杯戦争

【コード】

N 3 9 5 1 Y

【作者名】

度会

【あらすじ】

f a t e / z e r o を見ていてなぜか第三次を妄想してしまいました。

p i x i v でも書いてます。一応。

プロローグ(前書き)

二次創作なんで、そういう風なものに嫌悪を感じる人はご遠慮下さい。

プロローグ

最初に断っておく。

この聖杯戦争において勝者はただの一人も存在しない。

「聖杯戦争 それは六十年おきに繰り返される七人のマスターと七人のサーヴァントの殺し合いである」

汽車で疎開先から工場に向かう道中、彼は汽車に乗る前に手渡された手紙の一文を思わず口に出して読んでいた。

「こんなのを俺に渡してどうするんだよ爺ちゃん……」

どうやら彼は祖父から手渡された手紙の内容が理解出来ず頭を抱えているようだった。

それでも、道中は長いので再び手紙に目を落とした。

祖父からの手紙の内容を簡単に要約するならばこうである。

神秘学の語るところによれば、この世界の外側には次元論の頂点に在る“力”があるという。

あらゆる出来事の発端とされる座標。

始まりの御三家と呼ばれる人間が企てたのは、幾多の伝承において語られる『聖杯』の再現である。

あらゆる願望を実現させるといふ聖杯の召喚を期して、三家の魔術師は互いの秘術を提供しあい、ついに“万能の釜”たる聖杯を現出させる。

……だが、その聖杯が叶えるのはただ一人の人間の祈りのみ、という事実が明らかになるや否や、協力関係は血で血を洗う闘争へと形を変えた。

これが『聖杯戦争』の始まりである。

「全く意味が分からないな」

彼は内容をまとめることは出来たが理解するには至らなかったよう

だ。

「冬木市ねえ……」

彼が窓の外を見ると丁度冬木市に入ったところであった。

ここ冬木市は戦争の被害が少なく疎開地として使われている。

「爺さんの手紙を読むとこれも魔術師さんのおかげなのかね」

彼は窓の外を見てそう毒づいた。

窓の外から視点を自らの右手に移す。

そこには三画で描かれた奇妙な模様があった。

「この痣なんなんだろうな。石鹸で擦っても取れないし、もう諦めたけど……」

彼は隣にまで聞こえる位大きなため息をつく。

宗助はこれが原因で親に入れ墨をいれたと勘違いされ、つい最近大目玉を食らったばかりなのだ。

「爺さんは俺がこの痣が出来たのを見せると、いきなり手紙を渡してきたせいでまだ状況が呑み込めない」

彼は手紙の入っていた封筒の宛名に目をやる。

そこには彼の名前、すなわち、三木宗助の名前ではなく祖父の三木孝和の名前が書かれていた。

「爺さん宛てに書かれた手紙……だけどここの手紙の封は切られていなかった」

そこで宗助は何かを考えるように顎に手をやった。

「理由は分からないな」

宗助は深く考えることが苦手なのか、そう呟くと、丁寧に手紙を折って鞆の中にしまった。

最初のうちは窓の外の風景を楽しんでいたが徐々に睡魔に襲われて次第に船を漕ぐように首をコクリコクリと揺らす。

何度船を漕いだらうか、もう眠りに落ちそうな瞬間彼はカッと目を見開いた。

次の瞬間汽車の最後尾のドアが開く。

そのドアが開かれると同時に車内の空気がピシリと固まる。

扉を開けた主はカツカツと靴音を立てて車内を進む。

その彼は宗助達を工場へ連れていくための責任者のようで、名簿に鉛筆で何かを書きこんでいる。

宗助は彼が苦手らしくなるべく角がたたない様に隣の人と同じように姿勢よく座っていた。

しかし、彼は宗助の前で止まった。

三木の顔確認するかのように何度も名簿で名前と顔を承認している。

(……なにかしたかな俺?)

自分の過去の行いを振り返るように視線を上によったが、答えが出るはずもなく、ただ上を向いているだけだった。

「三木宗助だな」

やがて彼に名前を呼ばれた。

「はい」

名前を呼ばれたので宗助は思わず立ち上がる、背中には人からは見えないだろうが冷や汗がダラダラと流れている。

「少し来い」

彼は短くそうとだけ言うと、車内を後にする。

続けざまに宗助も続いた。

車両と車両の連結部で彼は待っていた。

「よ、用件はなんでしょうか……?」

三木の声は震えていた。

それもそのはずで彼は何かと体罰を加えることで有名だったのだ。

彼は、三木の震える声など意に介さずに手元にある資料を見つめている。

「……聖杯戦争」

彼の口から出た言葉に宗助は目を丸くした。

その反応を彼は見逃さなかったようで彼の口から笑みが漏れた。

「その様子だとなにか知っているようだな。君には次の冬木の駅で降りて貰いそこで一年後に始まるであろう聖杯戦争に参加し、勝利せよとの命令だ」

彼はそう言つと、宗助に対して今彼が読んでいた文章の原文を見せた。

宗助はその文章を一字一句見逃さず読むように目を走らせる。やがて見終えたのか宗助が目を離すと彼はその紙を自分の手元に戻す。

「では、そういうことだ。君は一年間魔術師として訓練を受けることになる。これは名誉なことだ」

彼の言葉に、宗助は曖昧に頷くことしか出来ない。

やがて目的の駅に着くと、宗助は一人降ろされた。

誰もいないホームにただ一人。

そして汽車は宗助の感情とは無関係に無慈悲に扉を閉める。

さながら拒絶するかのように。

汽車の発車音が耳に痛い。

暫くするとつんざくような音は消え静寂だけが残る。

宗助は誰もいないホームで一人ベンチに座る。

「あの文章には、逆らつたら家族の命は保証出来ないと書いてあった……」

宗助は悩んだ。

そもそも、魔術の素養などない宗助が一年やそこらで他の魔術師に太刀打ち出来るのか。

それでも宗助には、やるという選択肢しか残っていない。

母の顔、祖父の顔それから、家族の顔が思い出される。

この戦乱の中生き残っているのは奇跡に等しいのかもしれない。

その奇跡を味方の制裁で打ち消してたまるか。

「やってやる…やってやるよ」

この日、三木宗助は魔術師になることを余議なくされた。

半年前

彼女は冬木市にいた。

と言つてもどこからか越してきたわけではない。

ただ帰って来たのだ。

この忌まわしき土地に。

彼女はポケットから一枚の写真を取り出して少し微笑んだ。

そこに映る少女は彼女の妹だった。

ここに戻ってくる前に母方の家に預けてきたのだ。

大切だから。

もし自分になにかあっても無事に育って欲しいから。

妹への情は置いてきたはずの彼女だが、写真を見ると、幾分か気持ち
ちが落ち着いた。

彼女は数年前にここを出たきり久々の帰郷となるわけだが、街並み
が変わっていないことに驚いている。

そして、彼女は自らの生家辿りつく。

「この家は変わらないな……」

自然とそんな言葉が口をつく。

街並みよりも変わっていない。

まるでここだけ時間が止まっているようだ。

彼女は自分の家……屋敷に対してそう悪態を吐くと扉に手をかけた。
ガチャリと古めかしい音を立てて扉が開く。

屋敷の中にいた家政婦の何名かは彼女の姿に気づき声をかけようと
したが、彼女はそれを意に介さず目的の部屋へと歩を進める。

流石は勝手知ったる自らの家。

迷うことなく目的の部屋の前に着く。

その扉を開けようとした時体の中で何かが動くのを感じた。

久しぶりの感覚だ。

自分の中で得体のしれない何かが動いている。

そんな懐かしの感覚に苦笑しながら彼女は扉を開け放った。

部屋の中は電気は愚か光がどこからも入らない文字通り暗闇に包ま
れていた。

「久しぶりだな。臆硯」

彼女が暗闇に向かってそう叫ぶと暗闇がその声に反応するように動

く。

「久しぶりじゃの。巳苑^{ミリン}」

彼女、巳苑は臙硯の声を聞くと嫌悪感をあらわにした。

「どういう風の吹きまわしかの？てつきり貴様は死んだと思っ
たのにの」

カラカラと笑いながら一人の老人が姿を現した。

齡いくつになるだろうか。

巳苑には見当もつかない。

ただ、一つだけ言えるのは、臙硯は私が生まれてからずっと老い
ても若返ってもいないことだけだった。

そして戸籍上の、あくまで戸籍上の巳苑の父親だ。

巳苑は黙って右手に宿った三画の紋章を臙硯に見せる。

臙硯は、そのその紋章を見ると、ニヤリと口を歪めた。

「なるほど……どおりで、あいつには宿らないはずだ」

「アイツ？」

巳苑は臙硯の言葉に眉ひそめた。

臙硯の話によると巳苑を見離して分家の魔術的素養が高い人間に徹
底的に英才教育を施したそうだ。

勿論、学問などではなく、蟲に慣れるための訓練だ。

なるほど、確かに分家の人間ならば特に問題はないだろう。

要は適正の問題だ。

最初の御三家は聖杯戦争の参加資格を得ることが優先的に認められ
ているのだが、全く選ばれる気配がなく不審に思っていたらしい。

「それで、その人は？」

巳苑は大して興味を惹かれたわけでもなく、ただの話を速く進める
為に適当に相槌を打つ。

「それが、蟲に食べさせてしまったわい」

カラカラカラと臙硯は笑った。

巳苑はその声、表情、態度など臙硯の全てが嫌いだった。

幼い頃から修行と称した徹底的な蟲の凌辱。

苦痛しか残らなかった。

しかし、おかげで今の自分があるというのも皮肉な話だった。

巳苑の力を持つてしても臓硯の蟲を全て殺すことは出来ない。

死んでるモノを殺せと言っているようなものであった。

今ここであの魔術師に倣った火でもって臓硯の体を焼いてみるのはどうか。

巳苑の頭の中にふとそんな考えが浮かんだが、すぐにかぶりを振ってその考えを打ち消す。
だめだ。

その程度で何とかなるんだったら最初から魔術回路が宿った時点で殺している。

巳苑はそう心の中で毒づく。

腐っても魔術師。

いや腐っているから魔術師とでも言うべきか。

何度この体に流れるを血を恨んだことだろう。

まあ、いい。

それも今回で終わる。

「そういえば、あのいつも貴様の後ろについてきていた餓鬼が見えぬようじゃが？」

臓硯はそう言うと、私の後ろを見るような素振りを見せる。

餓鬼……か……。

コイツはきつと、妹の美鈴の名前なんて一度も聞いたことがないだろう。

魔術的素養がない人間はただの餌か。

「美鈴は……死んだ」

「嘘じゃな」

巳苑の嘘を臓硯は即座に否定した。

そして、例の薄気味悪いカラカラと声を出して笑った。

「貴様が、あの餓鬼を見殺しにしておいてそこまで平然としてられるわけではあるまい。それに貴様の嘘を見破るなど造作もないこ

とじゃ」

巳苑は臓硯に気づかれぬように歯噛みする。

「臓硯。アンタの望みって不老不死だったか」

巳苑の問いに臓硯は左様。と答えた。

「人間一人の寿命だけでは根源の渦に至るには短すぎるのよ」

そう臆面もなく言い切る臓硯を巳苑はキツと見据える。

確かに昔は、遠い昔、それこそ目の前にいるこの群体が人間であった頃の悲願はそうだったのかもしれない。

しかし、巳苑には今の臓硯にそんな望みは無いと考える。

死にたくない。

その妄執に取り憑く妖怪にしか見えなかった。

「私の望みはね……」

アンタを殺すことだよ、臓硯。

こいつさえいなくなれば、あの蟲達を使って何かをすること、ひいては間桐の家から魔術というモノから解放されるかもしれない。そうすれば、美鈴をこんな目にあわせなくて済む。

「カカツ。中々不穏なことを考えていそじゃの巳苑」

臓硯はそう言つと、巳苑に背を向けた。

「貴様には、まだ利用価値がある。長旅で疲れたじゃろ。どこかの部屋で休んでおれ」

そう言つて臓硯はまた暗闇に包まれた部屋の中に溶けていった。

巳苑は昔自分の使っていた部屋の扉を開けた。

そこは家を出ていった時と変わらぬままだった。

長年使っていたベッドに横たわる。

暫く使っていないかったせいか埃が舞った。

巳苑は趣ろに自らの手を天井に伸ばした。

「久々に出てきなよ蟲共」

巳苑の声が合図となつたのか、挙げられた巳苑の腕の方に向かって何かか巳苑の体の中を進んでいるかのように皮膚が盛り上がる。

そこから這い出た蟲は、大小様々でまた形状も一つ一つ変わってい

た。

ヴヴヴとうざったいような羽音を立てる蟲もいれば、地面にベタリと貼りついたままの蟲もいる。

彼らは蟲であつて虫ではない。

全て自然界に存在する昆虫とは遠くかけ離れた存在だ。

「この蟲共を体に入れて早二十年余り……そらこいつらも私を認めるわけだ」

元々、魔術の才能を色濃く受け継いでいた巳苑の体は蟲達にとつてはまさに御馳走のようなものであり、いくら蟲に知能がないとはいへ、長年付き合えば共生という関係が生まれるのも自明の理である。おかげで彼女が蟲を行使する際に感じる痛みや悪寒などはほぼ、存在しなかった。

「もし……この蟲達を例えば一年やそこらで制御しようとするならば、それこそ地獄を見なきゃならんだろうね」

でも、そんな考えは杞憂か。

そう考えて巳苑は被りを振った。

「だってこの醜い聖杯戦争は、私の代で終わるんだからね。だから、他のマスターってのには悪いけど死んで貰う」

鬨いに犠牲はつきものだ。

そうだよ。と妹の顔を思い出し、笑顔で虚空にそう問いかけると巳苑は規則正しい寝息を立て始めた。

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

反響あってもなくてもがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3951y/>

fatexx3 第三次聖杯戦争

2011年11月10日12時02分発行